

親愛なる会長・幹事・ ロータリアンの皆様へ

2017-18年度 国際ロータリー第2800地区
ガバナー 鈴木 一作

RIテーマ	ロータリー：変化をもたらす (ROTARY: MAKING A DIFFERENCE)
地区目標	美しい心、ロータリアンの矜持 ～修養、友情、情熱、奉仕、平和、感動～



◆新年のご挨拶

明けましておめでとうございます。地区大会も無事に終わり、ガバナー公式訪問も残すところ4クラブです。しかし、ガバナー月信の編集発行はまだ半年続きますし、RI会長賞や上林年度に向けての支援、各種セミナー、RYLAなど、まだまだ気を抜けない事業が目白押しです。本年も、宜しく願い申し上げます。

◆ロータリーとは？

さて、1月は「職業奉仕月間」です。イアン・ライズリーRI会長は、「ロータリーとは？」を自らに問いかけ、自らのロータリー観を省みることによって、明日からのロータリアンとしての活動を意義あるものにして欲しいと述べています。もちろん、100人いれば100通りのロータリー観があるでしょう。それでも、多少は表現が異なるものの、ロータリアンなら共通しているロータリー観が3つあります。それは、ロータリーは、「①ロータリアン同士の友情を基盤に、②価値ある奉仕をしている、③立派なロータリアンを育てている」の3つです。

◆「価値ある奉仕」の根幹は、職業奉仕である

我々ロータリアンは、一日の活動時間の大部分は仕事に従事しています。言い換えれば、「②価値ある奉仕」の大部分を職業奉仕に費やしているということです。すなわち、「自己の職業を通じて社会に奉仕（貢献）する」時間こそが我々の生活の大部分であり、しかも、それで家族や職員、関連業者なども含めて生活の糧を得ているのです。したがって、職業奉仕は最も重要な奉仕です。職業奉仕が充実していればこそ、他の「価値ある奉仕」も充実するのです。

◆ロータリーの根幹、金看板は、「ロータリーの目的」ではないか？

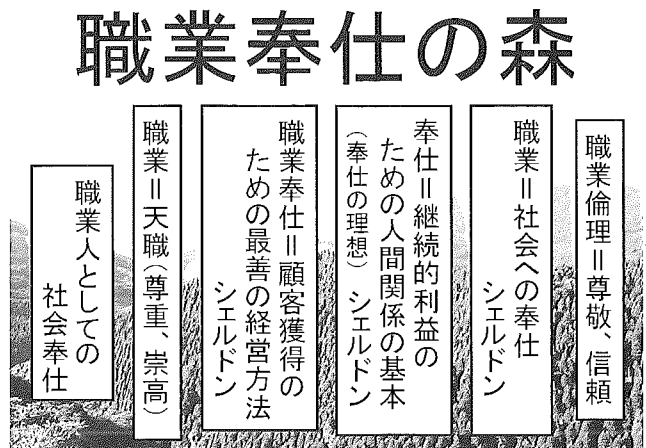
では、職業奉仕はロータリーの根幹、金看板と言ってもよいでしょうか？ 人それぞれ考え方は違うでしょうが、少なくとも「①ロータリアン同士の友情を基盤に」と「③立派なロータリアンを育てている」は、職業奉仕よりもクラブ運営そのものに比重がかかってくることは確かです。クラブの在り方、すなわち会長、幹事、クラブ奉仕をはじめとした各委員会、クラブ会員などの在り方も、ロータリーにとって重要だということです。実際、ロータリアンではない一般の職業人でも、「自己の職業を通じて社会に奉仕」しています。その中には、地域での社会奉仕、国際奉仕などもしている人だっているでしょう。だとすれば、①と③も満たしてこそロータリーです。そういう意味では、①②③を包含し、かつRI会長・ガバナー・クラブ・クラブ会員にとって共通の責務であり目標でもある「ロータリーの目的」こそ、ロータリーの根幹、金看板にふさわしいと、私は思っています。

◆職業奉仕は、森である

さて、「職業奉仕は難しい」という言葉をよく耳にします。理由は色々あるでしょうが、大きな理由の一つは、ロータリー通の大先輩による職業奉仕の説明が、人によって異なるからではないでしょうか？ ある大先輩は、職業奉仕は「シェルドンの考えそのものだ」と言います。また、「職業倫理そのものだ」と言う人もいます。最近のRIは、「職業人としての社会奉仕も職業奉仕だ」と言っています。さらには、「道徳律（職業倫理訓）」や「大連宣言」を説く人、「四つのテスト」を説く人もいます。これでは、聞いている方が混乱するのも当然です。これらに共通する特徴は、「職業奉仕は一本の大木」であるかのような説明でしょう。

私は、ロータリーを多方面から学んできて、「職業奉仕は一本の大木ではなく、森である」と思うようになりました。森は、高い所、低い所、陽のあたる所、あたりにくい所など、場所によって生えている木々は違います。しかし、それら全体で森なのです。ですから、例えば高い所に生えている木だけを説明しても、その森の全てを語ったことにはなりません。

それと同じように、「職業奉仕に対する考え方は、歴史上、



間違いなく幾つもある。すなわち、職業奉仕という森には、異なる様々な木々が生い茂っていて、また互いに影響し合って育っている。したがって、それらの木々全部を対象にして、はじめて職業奉仕を理解できる」と、私は思うのです。

では、「職業奉仕の森」にはどのような木々が生い茂っているのでしょうか？ 私は図に示したように、大きく分けると6つの木々群がある（そのうちの3つはArthur Frederick Sheldonの奉仕理論）と思います。以下、それらについて説明します。

◆ロータリーに、「奉仕 (Service)」という言葉が登場したのは1911年

「自己の職業を通じて社会に奉仕する」という考え方をロータリーに導入したのは、Arthur Frederick Sheldonです。1911年の全米ポートランド大会で、友人Chesley Reynolds Perry の協力により、A F Sheldonは彼の奉仕理論の象徴“He profits most who serves best”を結語とした「ロータリー宣言」の採択に成功します。すなわち、「奉仕 (Service)」という言葉が初めてロータリーの公式文書に使われたのです。もちろん彼は、それまでも機会ある毎に自分の「奉仕理論」を説明してきましたが、少なくともロータリーに正式に受け入れられたのは1911年です。

◆Arthur Frederick Sheldonの「奉仕理論」

A F Sheldonの奉仕理論の根幹は、「職業を通じて社会に奉仕したことで得られる『利益』と『事業の継続的発展』は、顧客奉仕に徹した事業経営によってもたらされる」というものです。その内容は、「経営学、販売学、人間関係学的な事業経営の理念と実践方法」であり、現代にも通じるものばかりです。

A F Sheldon の 奉仕理論

- 職業: 利益を得るための手段ではなく、社会に奉仕するために存在する
- 奉仕: 継続的な利益のための人間関係の基本
相手のニーズを最高に良く汲み取り、それを最高の形で満たすようにすること
奉仕の理想
- 職業奉仕: 顧客獲得の最善の経営方法
顧客奉仕の実践で事業は成功する
(結果的に職業倫理も向上する)

◆「ロータリー (クラブ) の目的」に、「奉仕 (Service)」が登場したのは1912年

ご存知のように、1905年、Paul Percy Harris らによってシカゴロータリークラブが創立しました。しかし、シカゴクラブの定款細則には「奉仕」という言葉はありません。5年後の1910年、全米16のロータリークラブがシカゴに結集し、全米ロータリークラブ連合会 (NARC) が結成されましたが、その際に採択された「ロータリークラブの目的 (この時点では、ロータリーの目的ではありません)」にも、「奉仕」という言葉はないのです。

1912年には、イギリス、カナダ、アイルランドなどが加入して、NARCは41クラブから成る国際ロータリークラブ連合会 (IARC) に改称されます。この時のダグラス国際大会では、「IARCの目的」と「ロータリークラブの目的」とが別々に採択されました。実は、後者の「ロータリークラブの目的」に、「奉仕」という言葉が使われているのです。すなわち、その第1項に「社会に奉仕する機会としての職業」とあり、A F Sheldon の考え方が活かされています。前年の1911年、全米ポートランド大会で前述の「ロータリー宣言」が採択されたことが、とても大きかったことを意味します。

◆「ロータリー (クラブ) の目的」に、現在の「職業倫理」が登場したのも1912年

さて、この1912年に採択された「ロータリークラブの目的」には、もう一つの注目すべき点があります。それは、現在の「ロータリーの目的の第2」の職業倫理に関する記載の原型が、既に記されていることです。すなわち、以下の3項目です。

- 全ての合法的職業は価値あるものであるという認識を深めること
- 会員各自の職業を高潔なものにすること
- 事業および専門職務の道徳的水準を高めるよう奨励すること

言うまでもなく、これらは「職業天職論」にも繋がる倫理観です。

◆「職業天職論」の反映とも言える職業倫理観は、イギリスの影響ではないか？

それにしても、1912年の「ロータリークラブの目的」は、1910年の最初の「ロータリークラブの目的」に比べると、あまりにも内容が違います。唐突と言ってもよいくらいの、格段の進歩です。なぜでしょう？ それは、A F Sheldon の影響だろうと考える人もいるかも知れませんが、あくまで彼の主眼は、職業を通じて社会に奉仕したことで得られる「利益」と「事業の継続的発展」です。そして、その手法が顧客奉仕の実践です。少なくとも職業を高潔なものにするという職業天職論的な発想は、A F Sheldonにはなかったのです。むしろ私は、ロータリーの歴史の流れから見て、この1912年にイギリスの加入したことが大きかったのではないかと考えています。すなわち、「職業は神聖な天職であり、道徳的で高潔なものであるべき」というイギリス流の考え方が、色濃く反映されたのではないかと思うのです。

◆実は、ロータリー創立時から「職業倫理」の萌芽はあったのではないか？

1905年、シカゴロータリークラブの創立時、P P Harrisは「洋服はショーレイ君に、法律は私、石炭はシール君に頼むという、一人一業種で親睦を深める会にしたい」と述べたと伝えられています。この実業互恵と親睦こそが、ロータリーの原点です。通常、この実業互恵は「異なる職業であることを利用した物質的相互扶助」と理解されており、実際、当時のシカゴクラブ定款第2条の目的にも「本クラブ会員の事業上の利益の増大」が謳われています。しかし、「クラブ会員同士、友達になって金持ちになろう」という考えを、果たしてP P Harrisは持っていたのでしょうか？ 原価取引の原則など、会員を増やすために、そういう一面もあったことは否定しませんが、むしろ私はP P Harrisの言葉に職業倫理の萌芽を感じるのです。

当時の資料には、無秩序な自由競争のもと、誇大広告や虚偽広告がまかり通り、詐欺的な取引や不法な取引が横行し、金を儲けた者が成功者としてもはやされていた時代だったと記されています。そういう時代背景の中で、「ロータリアン同士の親睦と信頼の上に立って、互いを裏切らない取引をしよう」という考え(気持ち)は、至極当然のように思うのです。弁護士だったP P Harrisには、なおさらそういう思いが強かったのではないのでしょうか。

◆ロータリーの公式文書では、「職業倫理」は「奉仕 (Service) 」よりも先である

1910年、シカゴでNARC設立時に採択された「ロータリークラブの目的」には、「進歩的で尊敬すべき商取引の方法を推進すること」が記されています。当初の草案では「会員相互の取引関係を増大すること」だったのですが、最終的には上記のように変更されました。要するにロータリーは、1910年に「金儲けよりも職業倫理へ」と正式に舵をきったということです。こうして、「進歩的で尊敬すべき商取引」、すなわち職業倫理を謳った公式文書が、ロータリーの歴史上、初めて採択されました。注目すべきは、「奉仕 (Service) 」という言葉がロータリーの公式文書に初めて登場したのは1911年の「ロータリー宣言」ですから、それよりも前の出来事だったということです。

そして、この「進歩的で尊敬すべき商取引」を受けた形で、1912年に採択された「ロータリークラブの目的」に、前述した職業倫理3項目(現在の「ロータリーの目的の第2」の原型)が入ったのです。さらに、同年に採択された「IARCの目的」には、以下に示す「道徳律(職業倫理訓)」への道筋が記されました。

◆「道徳律(職業倫理訓)」への流れ

この1912年のダルース国際大会で「ロータリークラブの目的」とは別に採択された「IARCの目的」も、ロータリーにおける職業奉仕を考える上で重要な意味があります。それには、「既存するロータリークラブの活動、および会員や地域社会に対するクラブの価値を研究し、それで得られた全てのクラブにとって有益な情報を明示すること」と記されているからです。これを受けて、翌1913年のパッファロー国際大会で、「事業上、適用すべき実践的な模範例を収集してまとめる」ことが決議されました。

こうして全世界のロータリアンからアンケートをとり、収集した数百もの事例を簡潔な表現にまとめたものが、1915年のサンフランシスコ国際大会で採択された「全分野の職業人を対象とするロータリー倫理訓」です。これは、心あるロータリアンの職業上の実践や倫理観をまとめた11箇条として、「道徳律(職業倫理訓)」とも呼ばれています。第1条には「職業は社会に奉仕する絶好の機会」、第2条には「“He profits most who serves best”を実証すること」とあり、第3条から11条にかけては、職業上の倫理基準とすべき具体的内容が記されています。すなわち、「道徳律」は、「A F Sheldonの奉仕理論」と「職業倫理」の両方から成っているのです。

翌1916年、Guy Gundaker がロータリー最初の解説書「A Talking Knowledge of Rotary」を発行しました。これには、当時のロータリーの基本理念や活動の在り方とともに、「道徳律」の全文も掲載されています。しかも、その冊子は世界中のロータリークラブに配布されたのです。まさに、第一次世界大戦(1914~1918年)の最中の出来事でした。

◆その後の「道徳律(職業倫理訓)」

さて、1922年のロサンゼルス大会で、IARCは国際ロータリー(RI)に改称されました。その際、これまでの「IARCの目的」と「ロータリークラブの目的」は大幅改正されて一つにまとめられ、また、定款細則も大幅に改正されました。注目すべきは、そのRI細則の第16条に「1915年の道徳律を以てロータリーの現行法則たるものと定める」とあることです。要するに、「道徳律」は、全世界のロータリークラブに対して一つの規範としての効力を持つようになったのです。

一方、「道徳律」に対しては、その内容の厳しさと表現が宗教的であるという理由から、P P Harrisをはじめ、当初から批判的なロータリアンも少なくありませんでした。結局、こうした声の広がりを受けて、RIは1927年に改定委員会を設置し、1931年には「道徳律」の領布・宣伝を禁止してしまいます。さらに1951年には、「道徳律」の内容そのものがロータリーの公式文書から姿を消しました。但し、「道徳律」という言葉だけはRI細則第16条に残されましたが、それも1980年の改正で抹消されています。現在では、「道徳律」は歴史的文献として扱われ、RIの公式文書には掲載されていません。

◆ロータリーに、「職業奉仕」という言葉が登場したのは1927年

さて、1927年のオステンド国際大会では、「目標設定計画に基づく四大奉仕の分割」が採択されました。これによって、それまでロータリーの基本理念であった「一般奉仕概念」が、クラブ奉仕・職業奉仕・社会奉仕・国際奉仕の4つに分けられまし

た。実は、ロータリーの歴史上、ここで初めて「職業奉仕」という言葉が登場したのです。この時の職業奉仕の定義には、「ロータリアンがそれぞれの職業を通じて他の人々に奉仕すること」と「高い道徳的水準を保つこと」が明記されています。すなわち、「職業を通じて社会奉仕」と「職業倫理」の二つが、職業奉仕の定義として採用されたのです。

もう一つ、留意すべきことがあります。それは、「職業奉仕 (Vocational Service)」のVocationは、天職という意味合いが強い言葉だということです。Business (事業) やProfession (専門職務) を包含した従来の(いや、本来の) Occupation (職業) ではなく、敢えてVocationが使われたのは、職業に宗教的色彩を含めることを嫌っていたA F Sheldon にとっては不本意だったようです。また、それまでロータリーの基本理念の中心にあったA F Sheldonの奉仕理論が、職業奉仕だけに閉じ込められたことを失望したとも言われています。英国人のSheldon嫌い、P P Harrisとの対立など、諸説はありますが、いずれにしても失意のA F Sheldonは、1930年にシカゴクラブを退会し、1935年に67歳でこの世を去りました。

◆「職業奉仕に関する声明」は、職業奉仕の大転換だった

前述した「道徳律」の衰退につれて、実は、職業奉仕そのものも徐々に冷遇されていきました。RIは、1948年に職業奉仕委員会を廃止し、1963年の「職業分類の概要」の発行を最後に職業分類への関与からも手を引いてしまい、RIのプログラムから職業奉仕は消えてしまったのです。

ところが1987年、RIに職業奉仕委員会が約40年ぶりに復活し、あらたに「職業奉仕に関する声明」が出されました。内容は職業倫理を重視したのですが、次の二つの点で、ロータリーにおける職業奉仕の歴史上、大きな転換点と言われています。一つは、クラブにおける職業奉仕の具体的活動指針を示し、かつ奨励したことです。これは、「クラブ自体も職業奉仕(事業) をすること」を意味します。もう一つは、「自己の職業上の手腕を社会の問題やニーズに役立てること」という記載です。これは、「職業人としての社会奉仕は(職業上の知識や技術を活かす点で)“職業奉仕”である」という意味です。なお、私としては、「職業を通じて社会に奉仕する」という記載がなかったことも気になります。

◆「ロータリアンの職業宣言」と「道徳律(職業倫理訓)」との違い

2年後の1989年、規定審議会で「ロータリアンの職業宣言」(8箇条)が採択されました。これは、前述した「道徳律」の欠点(内容の厳しさと宗教的色彩)を修正したものとされています。しかし、「道徳律」と比べると、第1条には「職業は奉仕の一つの機会」とありますが、「He profits most who serves best」の記載はありません。留意すべきは、職業上の倫理基準とすべき具体的内容の他に、「自己の職業上の手腕を捧げて、青少年に機会を開き、他人からの格別の要請にも応え、地域社会の生活の質を高めよ」という記載があることです。「職業人としての社会奉仕」の1つとして、RIが「自己の職業を活かした青少年への奉仕」を特に奨励し始めたのは、この時からです。

◆「ロータリアンの職業宣言」から「ロータリアンの行動規範」までの改編・縮小

1989年の「ロータリアンの職業宣言」(8箇条)は、2011年のRI理事会で「ロータリーの行動規範」(8箇条)に改編され、2014年にも改編・縮小(5箇条)されました。さらに同年に「ロータリアンの行動規範」(4箇条)と呼称が変わり、第5条にあった「事業や職業における特典をほかのロータリアンに求めない」が削除されてしまいました。これは、ロータリアン同士の物質的・金銭的な相互扶助を奨励し、RIによる会員特典プログラムの活用を推奨できるようにすることが目的です(もちろん、私は不本意です)。

「ロータリアンの職業宣言」から「ロータリーの行動規範」、そして「ロータリアンの行動規範」へと改編・縮小が続きましたが、どれも職業倫理を重視しつつ、職業人としての社会奉仕(特に青少年への奉仕)を奨励した内容です。但し、1989年の「ロータリアンの職業宣言」にあった「職業は奉仕の一つの機会」という記載は、2011年からはありません。

◆現在の「職業奉仕」の定義は、標準ロータリークラブ定款「第6条」

さて、1927年のオステンド国際大会で採択された「職業奉仕の定義」は、2007年の規定審議会によって標準ロータリークラブ定款上の「四大奉仕」という形に変更され、2010年には「五大奉仕」に修正されました。どちらも「ロータリーの目的」の第2に準じた内容であり、職業倫理を謳った上で、奉仕の理想(理念)を目的とするものと記されています。その定義で留意したいのは、①1927年に採択された「職業奉仕の定義」にあった「職業を通じて社会奉仕」という表現がなくなっていること、②「職業人としての社会奉仕」という内容は含まれていなかったことの2つです。ちなみに、①については、「A F Sheldonの奉仕理論」の冷遇・排除は最近のRIの傾向だと認識しています。一方、②については、案の定、2016年に「自己の職業上の手腕を社会の問題やニーズに役立てるために、クラブが開発したプロジェクトに応えること」が追加されました(標準ロータリークラブ定款「第6条」)。

◆職業奉仕の森

以上、職業奉仕の歴史を概観してきました。職業奉仕は決して1本の大木として説明できるものではないことが、恐らくご理解いただけたものと思います。「職業倫理」、「A F Sheldonの奉仕理論3つ」、「職業天職論」、「職業人としての社会奉仕」は、互いに影響し合い、あるいは多少は重複し合い、さらには変遷しながらも、それぞれが独立した「職業奉仕の要素」なのです。もちろん、どれが正しい職業奉仕で、どれが間違った職業奉仕だなどという議論は不毛です。それらに、順位や優劣をつけることにも意義を感じません。むしろ我々ロータリアンは、それぞれを日々の活動の中で大いに実践しようではありませんか。なぜなら、どれもが職業に関連した価値あるものばかりですし、どれもが「職業奉仕の森」の中で生い茂っている木々群なのですから。